

A L P T 通信

令和2年度第7号
静岡県総合教育センター
アクティブ・ラーニングプロジェクトチーム



3密を避けて授業研究、どうすればいい？

—授業前後理解比較法と学習過程可視化法を生かした授業研究—

今回は、**いかにして子どもたちの学びを保障するのか？**について、教員研修の視点から考えます。
サポートブック＆新学習指導要領対応授業改善推進サポート研修（高）で提案している授業研究の方法に沿って、コロナ禍の下で取り組む場合のちょっとした配慮を確認します。

事前研修

■授業設計診断の4項目に基づいた授業デザインを共有する。

- ・授業の概要を理解する（先生方が子ども役になって模擬授業を行うと有効！）。
- ・「解決したい課題や問い」に対する自分なりの解答や、子どもが出しそうなキーワードを考える。

授業設計診断の4項目

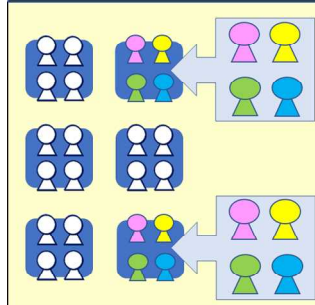
解決したい課題や問い
考えるための材料
対話と思考
学習の成果

研究授業

■事後研修を念頭に置いて、子どもを観察・記録する。

- ・あらかじめ観察・記録する子どもを分担しておく。
子ども一人に対して教員一人付くのが理想的だが、学習集団の規模や、観察する教員の数に応じて、**観察・記録の対象グループを限定**することも考えられる。
- ・分担して、子どもの発話や行動を記録する。
近付いて記録するのは、**学びが深まる過程で重要な場面の時だけに限定**する。グループ内の子どもの付箋を色分けすると後で整理しやすい。

対象グループを限定する



工夫例①記録する教員の限定

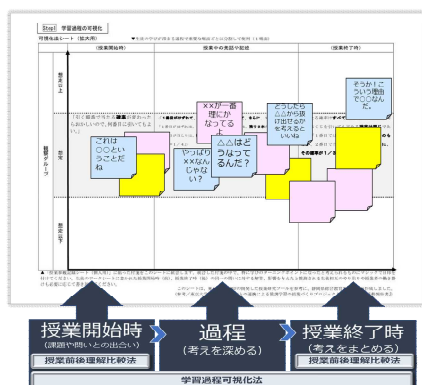
工夫例②記録する場面の限定

事後研修

■二つの分析方法（授業前後理解比較法・学習過程可視化法）に基づいた授業分析を行う。

step1 学習過程の可視化

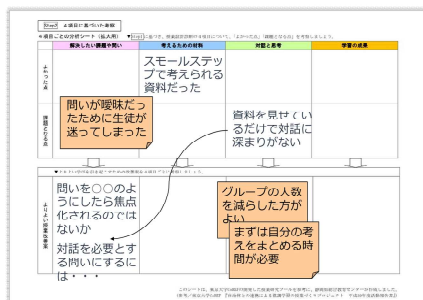
付箋を拡大シートに統合する。**対象グループを限定した場合、スクリーンに投影するなどして全体共有が可能。**



工夫例③step1 全体共有

step2 4項目に基づいた考察

学びの深まりやつまずきの要因を分析し、改善案を出す。
リスクを下げるために対面を避け、**ホワイトボードやICTを活用して、前向きに協議**することも考えられる。



工夫例④step2 前向きで協議

step3 振り返り

- 授業者からの振り返り
- 参加者の振り返り
明日からの自身の授業につながる一言を！

詳しくはこちらから！

（高校用資料をダウンロードできます）

- 使用するシート
- 事前研修用説明動画
- 授業者用資料



「主体的・対話的で深い学び」の主語は子ども

学習指導要領解説総則編では、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点に立った授業改善を行うことについて、中央教育審議会答申（平成28年12月）を引用しながら解説しています。

教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童（生徒）の状況等に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。

この文章の**主語は子ども＝学習者**です。答申では「まず学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、育成を目指す資質・能力を整理する必要がある。その上で、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶか」という、子供たちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある。」と述べています。子どもが「どのように学ぶか」の姿として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」です。

指導する教師＝授業者は、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、**子ども＝学習者の視点に立って授業設計・実践・評価**していく授業改善のPDCAサイクルを回すことが求められています。

（参考／国立教育政策研究所「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」令和2年6月）

学習者の視点で授業改善サイクルを回す



授業研究は、組織的に行う「学習評価」

新学習指導要領では、学習評価の充実により授業改善のPDCAを回すことで、子どもの「主体的・対話的で深い学び」を促すことを重視しています。一口に「学習評価」と言っても、様々な側面があります。まず重要なのは、**学習評価の改善は授業改善と不可分の関係にあること**です。教師が自らの指導のねらいに即して実践した授業において、「主体的・対話的で深い学び」の実現状況と子ども一人一人の学習状況を評価することは重要な意味を持っています。これを全ての先生方で行うことで、組織的な授業改善が推進できます。子どもの資質・能力の育成を目指して「**評価**」でつながるイメージです。

サポートブックで紹介している2つの授業分析手法のうち、授業前後理解比較法は、授業者、個人の振り返りに用いることができ、比較的簡単です。学習過程可視化法は、教科を横断して組織的に形成的評価を進めることができます。2つの方法の特徴を生かすことで、「**子どもがどう学んだか**」が**つぶさに見える**ようになり、単に印象を述べ

るにとどまらない授業分析の活性化が期待できます。学習の過程や成果を丁寧に見取り、指導の改善や学習意欲の向上を図ることが、学習評価の充実につながります。

学びに見える化する分析方法

	授業前後理解比較法	学習過程可視化法
活用 の 場 面	授業者、個人の振り返りに、日常的に用いる。  日々の形成的評価の充実－指導と評価の一体化－	校内研修における授業研究で活用する。  学校全体で行う組織的な授業評価（授業研究）
参 考	校内研修における授業研究で用いることも可能である。	教科を横断して形成的評価を進めることができる。

（今回は高等学校支援課が担当しました）